

正誤表・更新情報

本書中に訂正・更新箇所等がございました。お手数をお掛けしますが、下記ご参照頂けますようお願い申し上げます（2022年4月28日）

■第1版 第4刷（2022年2月15日発行）の修正・更新箇所

※第1刷からの修正箇所はhttps://www.yodosha.co.jp/correction/9784758109727_corrections.pdf をご参照

頁	場所	修正前	修正後	補足	掲載
1章3					
47	1～2行目	前の2.正規分布を知ろうで話した…… 正規分布に近づくため 、二項分布は、	また、二項分布は、		22/04/28
47	側注※14	二項分布は回数nが大きくなるほど正規分布に近づいていきます 。これをラプラスの定理といいます。	これをラプラスの定理といいます。	冒頭の1行を削除	22/04/28
3章1					
68	「重要な公式」2行目	サンプルサイズ が大きいに成り立つ	母集団のサイズ が大きいに成り立つ		22/04/28
71	側注※7	サンプルサイズ が大きいに	母集団のサイズ が大きいに		22/04/28
71	下から2～3行目	中心極限定理より……当てはめて考えられます 。正規分布の性質	正規分布の性質	1行削除	22/04/28
72	「●信頼区間を求めてみよう」5行目	2.0となります。 サンプルサイズは大きいので 、	2.0となります。	1文削除	22/04/28
74	「④仮説の採択」2行目	正しい場合の データ の分布	正しい場合の 検定統計量 の分布		22/04/28
74	「④仮説の採択」6行目	(差がない)場合の データ 分布	(差がない)場合の 検定統計量 の分布		22/04/28
74	側注※14, 3行目	データ 分布で、	検定統計量 の分布で、		22/04/28
74	側注※14, 図タイトル	帰無仮説が正しい場合の データ 分布(帰無分布)と棄却域	帰無仮説が正しい場合の 検定統計量 の分布(帰無分布)と棄却域		22/04/28
3章2					
80	「重要な公式」2行目	$t = \frac{\text{データの差の平均値}}{\text{データの差の標準誤差}}$	$t = \frac{\text{データの差の平均値}}{\text{データの差の標準誤差}}$ (対応ありの場合) $t = \frac{\text{データの平均値の差}}{\text{データの平均値の差の標準誤差}}$ (対応なしの場合)		22/04/28
82	側注※3, 1～2行目	中心極限定理(→1章3-2)により , 自由度が大きく	自由度が大きく	1文削除	22/04/28
87	下から4～5行目	どちらも対応のあるt検定と同じように t値($t = \frac{\text{データの差の平均値}}{\text{データの差の標準誤差}}$)を計算して、	どちらも t値($t = \frac{\text{データの平均値の差}}{\text{データの平均値の差の標準誤差}}$) ^{※12} を計算して、		22/04/28
87	側注		※12 対応のあるt検定では対応するデータの間で差を出してから平均値を求めましたが、対応のないt検定では各群の平均値を出してからその差を求めます。	側注を追加	22/04/28
87	下から1～3行目	対応のないt検定の場合、 t値と自由度の計算は複雑になるので省略します 。ここでは使い分けだけ押さえてください。	対応のないt検定の場合、 計算は複雑になるので 使い分けだけ押さえてください。		22/04/28
5章1					
123	下から4行目	2020年には28.9%	2030年には31.2%		22/04/28